

第二節 新劇の勃興と震災前夜における新劇人 その二

演劇革新の重要な要素である女優の養成は、明治四一年川上音二郎と川上貞奴により設けられた帝国女優養成所が嚆矢とされる。その開所式が芝の大庭理髪店二階で開かれ、列席した渋沢栄一は入学者に次のような式辞を述べた。「従来世間から賤しめられていたものが三つある。一つは私の様な商人で、女子と俳優だ。私はその賤しめられた素町人の立場から、大いに女子と役者に同情を表する。」① この養成所は三年後帝国劇場に付属芸学校として受け継がれ、第一期の女優十一名が同劇場で河竹黙阿弥原作の『透写筆命毛』等に起用された。こうした女優の養成と起用の歴史的意義が、大地震三年前に刊行された『帝劇十年史』に記述され、演劇志望者への激励も付記される。

「帝国劇場芸芸学校」（杉浦善三著『帝劇十年史』）

炯眼なる川上（音二郎）氏は組織的に女優を養成する事の必要と利益なるを思い、ここに芝区桜田本郷町十七番地に帝国女優養成所なるものを設置し、妻女貞奴をしてこれにあたらしめ、一方帝劇の諒解を得て新

① 井上清三著『川上音二郎の生涯』葦書房、一九八五年。一〇七―一〇九頁。

「女優養成所開所式」『渋沢栄一伝記資料』第二七巻、四三八頁。

女優志願者の募集を開始す。・・・（明治四二年七月）これを帝劇の直轄経営に移し、校舎として構内に新館六二坪の工を起し、学則その他を東京府庁に申達して認可を稟請し、十七日を以て時の府知事阿部浩氏よりその指令を受く。・・・

四三年三月二六日帝国劇場株式会社取締役会長・男爵渋沢栄一氏、付属芸芸学校総長に就任し、芸芸学校はここに内容外形共に具わりて其存在を明かにし、同年九月十六日第一期卒業生十一名を出せり。・・・願れば、付属芸芸学校開校以来入学せるもの合計五五名、此中完全に業を卒えたる者三六名、現在生徒十二名、落伍者通計七名也。而して三六名の卒業者中、現に帝劇に出演しつつあるは十九名にして、他は廃業者若しくは他座に転じたるものなり。

案じるに吾女優界は未だ過渡時代に属し、かのエレン・テリーの如き、サラ・ベルナルルの如き、エレオノラ・ドゥーゼの如き、若しくはモウド・アダムスの如き一代の名優を出して、劇壇を風靡する事難しといえども、そもそも吾国劇が出雲の阿国なる一女性によって創始せられ、爾来幾百年の繁栄を継続し来りしは、つとに諸賢の知る所なるべし。ただ吾邦における女優の発達は、徳川幕府の風俗取締政策によって阻止せられ、ここに一頓挫を來たせり。かくて今日の女優はかえって教えを男優に乞うに至れるは、やむを得ざる理数ならんや。然れども言うを休めよ、女優は男優を凌ぐ能わず、と。吾国劇の揺籃を揺り動かせるものは女優にあらずや。要は研究努力の如何にあり。彼等にして他日若し出雲阿国が一世を風靡したるに倣うを得ば、ひとり彼等の為のみならず、演劇界全体の為に慶すべきの事たり。いささか付言して女優諸嬢の奮起を

昭和二年帝国劇場の檜舞台で美事主役を果たし、新たな大女優と注目された伊沢蘭奢（三浦シゲ）は、森鷗外の故郷津和野で製紙業の娘として育った。十九歳の春叔父や媒酌人の勧めに従って製菓業の子息伊藤治輔と結婚し、翌年長男の佐喜雄を出産。しかし、事業の不振と大家族の因習が夫との軋轢を募らせ、やがて六歳のわが子を残して婚家を離れた。彼女が女優への道を志して上京し、近代劇協会上山草人のもとへ入門したのは、大正七年二九歳のときである。こうした果敢な決意の動機は、松井須磨子主演『人形の家』を観劇した感銘や、同郷たる徳川夢声と中村吉蔵からの啓発を含むとされる。②

女優への志願と訓練（伊沢蘭奢著『素裸な自画像』）

わたしは二二、三の頃から女優になりたいと思っておりました。もとより明確な芸術的意識というむづかしい考えもなく、ただ漠然と女優になってみたいと思う念願が胸一杯でありました。・・・わたしが二九になった年の三月は、丁度女優志願の鳳仙花の実が、はじき出た時でありました。従来の日本の女優さん達は

① 杉浦善三著『帝劇十年史』玄文社、一九二〇年。一一九―一二〇、一二三―一二四頁。

〔参照〕「帝国劇場付属芸芸学校」『洪沢栄一伝記資料』第四七巻、四一五―四二三頁。

② 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』世界社、一九二九年。二三―五三頁。

みんな若くて美しい。いろんな遊芸の心得もある。それにまた平素都会情調というような進歩した空気にひたって、一種のカルカチュアを味わっている。けれども私はちっとも屈託しませんでした。だが、ひとつのブライドとして固く握りしめているものがありました。それは三十年に近い実生活の体験を舞台に移して、観衆と一緒に雰囲気の中に呼吸し、同じ人生観、世界観を理解し合う境地を演出してみようという考えでした。わたしの経験は日々毛穴から吸い取ったものの結晶である、稽古場ばかり概念的につきこまれた、浅薄な知識ではないという自負心を持っていたのでした。・・・

とにかくわたしは沢山の夢をのせて、新しい世界を展望しながら東京に出て来ました。女優として師事する人をあれかこれかと考えました。その頃新劇歌劇の方面で盛んにやっていたものは、須磨子の芸術座、草人氏の近代劇協会、それにロシー一座などでした。その三つの内どれかにしようと思いました。・・・

一刻も早く志を得たいと思って焦っているわたしは、ある日だれの紹介もなく、突然上山草人氏を訪ねていったのでありました。芝口の平民食堂と対峙して、入口の硝子戸には（浦路まゆずみ）の一杯墨で無難作にかきつけてある、（かがしや）なる近代劇協会は、わたしの予想を裏切ってあまりにも貧弱なものでありました。・・・見るからに精力を偲ばせる光りのある大きな眼玉、ハッキリした曲線に顎髯のある三四、五の洋服姿が現れて、莞爾として迎えてくれました。それが上山先生であつたのでした。

わたしは丁寧に来意を告げた後、何等の素養もなく田舎から出て来たばかりののですが、是非先生のお教えを受けたいと述べました。K先生はわたしがどういう動機からこの方面に志を立てたのかということを聴かれました。・・・K先生はわたしの話を熱心に聴いて、いろいろと御自分が今まで女優を養成して来た回顧を語られました。そうして俳優というものは外から見てるように楽の職業でないこと、虚栄心があるよ

うでは根本的に不適当であること、貧乏に堪え努力してゆかねばならぬこと、舞台人は自分自身の体だと思つてはならぬこと、団体生活には忍従心が必要であること、そうしてまた平素の修養を怠るものは、その人の個性がそのまま舞台に現れて醜いものだから、そのに注意せねばならぬことなど、いずれも未知の世界に乗り出そうとする私の将来に尊い玉条ともまる話を親切にして下さいました。

その瞬間わたしの頭の中にはまた、約十年間の自分の変転がいなづまもような速さで一巡しました。今までのわたしにとっては全く畑違いのこのような職業世界とは、一生交際なしにあの山陰道の小さな田舎町に、もの堅い商家の主婦として死んでしまうのだとまで悲観し切っていたわたしが、遂になんの苦もなくここまで踏み出して来て、希望の峰に登りつめたような気持は、ほとんど夢のように感ぜられました。・・・K先生は奥さんの浦路さんや妹の珊瑚さんを遇するといなじように、心から良き女優の養成に心を尽し、なにごともかけ隔てのない態度を示してくださいました。さていよいよこの道に入ってみると、凡て今までの生活とは違っているので、わたしは国訛を一つ直すだけでもなかなか容易の苦勞ではありませんでした。シェークスピア、イブセンその他翻訳劇の数々、それを銘々が台本から書き抜いて、幾千人の人の耳にも透るような大きな声で、本意気の稽古を毎日続けるのでした。空き切ったお腹をかかえて、協会の向いにある平民食堂へ研究生の人達とぞろぞろくり込んでいくのでした。そうして一食十銭の井飯に誰もが不平を感ずる様子もなく、ばくつきました。①

① 伊沢蘭蓍著『素裸な自画像―伊沢蘭蓍遺稿』五四―六一頁。

新派の中軸、初代水谷八重子（松野八重子）も、新劇勃興の流れに浴して成長した。彼女の初舞台は八歳のとき、島村抱月と松井須磨子による芸術座結成の時点にまで遡る。時計商の次女として生まれ八重子は、父の逝去により五歳にして母とともに姉夫妻のもとに身を寄せた。義兄の水谷竹紫は雑誌の編集に従事する一方、やがて芸術座の活動に参加し、八歳の八重子をもここへ導く。

新劇における舞台経歴（水谷八重子著『女優一代』）

文芸協会を脱退した島村先生はその年（大正二年）の五月、先生を慕う作家や同調者の支持をうけて劇団を創立されました。それが芸術座です。義兄の水谷竹紫もこれに参加いたしました。この芸術座の創立で早稲田系の作家や評論家は、坪内派・島村派に二分された形になりました。義兄は経営部長として参加したのです。陣容の整った芸術座はその年の九月、丸の内の有楽座で旗上げ公演を行いました。だしものはメーテルリンクの『内部』と『モンナ・ヴァンナ』の二本で、この『内部』が意外にも私の舞台出演のキッカケとなり、そして今日に続いているわけです。

『内部』は舞台の正面に窓を飾りつけ、外の群衆の動きや表情で、部屋の中の出来事を見せるという洒落た芝居でしたが、私はその群衆の子役をやらされたのです。・・・二、三度お稽古に連れて行かれるうちに、どうしても私にセリフをいわせて、舞台の効果を出そうとしたらしく、初日の舞台があく前になって、「みえないから、どいてよ！」というセリフを大声でいうよう申し渡されました。恥ずかしかったせいもありま

しょうが、子供心にもそれでは約束が違うといつて、とうとう千秋楽の日までセリフをいみませんでした。今になって考えてみますと、当時から相当の強情っぱりだったようです。私の初舞台は大正五年十二月帝劇で『アンナ・カレーナ』のセルジをやったことになっていますが、実際はこの『内部』でした。

この芝居で松井須磨子さんや沢田正二郎さんに初めてお目にかかりましたが、お二人とも毎日奪い合うようにして幼い私の顔のこしらえをして下さったものです。また、群衆の一人として秋田雨雀先生がご出演になったのを記憶しております。秋田先生はこの芝居の翻訳者で、文芸部に籍をおいておられましたが、人手が足りないため出演されたのだそうです。小柄で、みるからに優しそうな方でした。・・・

(大正五年)の七月には稽古場である牛込の芸術倶楽部で(芸術座は)トルストイの『闇の力』の試演会を開きました。芸術倶楽部というのは牛込の横寺町にありまして、芸術座所有の稽古場だったのです。この試演会に私もアニュートカで出演することがまりました。ちょうど学校も休みだったので、義兄から出演話をもちかけられても、ダダをこねるようなこともなく、素直に出演を承知しました。

演出はもちろん島村先生で、一か月近く激しい稽古が続けられました。『復活』や『サロメ』で「新劇の墮落」などと叩かれたあとだけに、全員の意気込みも悲壮ながたよっておりました。その甲斐があつて、小山内先生からも「演出、演技とも芸術座の生涯で最良」との讃辞を頂き、私のアニュートカも「子役のもつ嫌味がなく、非常に的確な演技」とお褒めにあずかりました。この好評による喜びが自然に私の方向を切り拓いてくれ、引き続き十二月の帝劇公演『アンナ・カレーナ』につながって行ったのです。・・・

その年の十二月『アンナ・カレーナ』にセルジの役で私の出演がきまりますと、島村先生が「いっそのこと、この際八重ちゃんの初舞台として披露しては」と薦めて下さいました。この時までは本気で私を女

優にする気のなかった義兄も姉も、先生の言葉に応じました。

このことをお聞きになった脚色家の松居松葉先生は「八重ちゃんが初舞台の披露をするなら一幕書き足してやろうね」と、母のアンナに別れたセルジが淋しく老婢と遊んでいりところへ、アンナがそつと訪ねて来て、肉親の愛情に泣く場面を加筆して下さいました。この松居先生が加筆して下さいた須磨子さんのアンナと私のセルジの再会の場合が評判になって、まずは上々の首尾でした。・・・

大正九年二月私はもう双葉高等女学校の二年生になっておりました。その時音楽座でメーテルリンクの『青い鳥』が上演され、私がチルチルの大役に抜擢されて出演いたしました。この上演お話がもち上りましたのは、畑中蓼波先生が主宰しておられた新劇協会のプランによるものです。・・・スタッフは演出・畑中蓼波、装置・岡本帰一、作詞・三木露風、振り付け・石井漠、そして作曲は最近お亡くなりになった山田耕筰と、いずれも錚々たる諸先生方でした。出演社はチルチルの私、ミチルの夏川静江さんのほかに塩見洋さん、伊沢蘭奢さん、上山珊瑚さん、まだ早稲田の学生だった友田恭助さんといった顔ぶれ。・・・

五か月にわたる厳しい稽古が実を結んだのでしょう。『青い鳥』は非常に好評でした。小山内先生が「近來これほどいい気持でみた芝居はない」と激賞して下さいたのははじめ、各新聞や雑誌でも一様に讃辞を頂戴しました。ちょうど芸術座解散から築地小劇場の演劇運動がはじまるまでの発酵期間にもあたっていたわけ、それだけに、波紋も大きかったのではないかと思います。①

貧しい母子家庭で育った山本安英（山本千代）は、内職に追われる母を幼いときから気遣い、やがて東京の伯父母に預けられて女学校に通った。医家である伯父は謹厳であったが、伯母の好意で踊りや長唄を稽古し、月刊『演芸画報』の耽読を楽しみにする。新聞広告で知った市川左団次の俳優養成所に応募し、小山内薫の面接を受けた。大地震の二年前、大正十二年暮に彼女は、小山内の戯曲『第一の世界』に抜擢され、帝国劇場において初舞台を踏む。この師走興行には土方与志が演出に加わり、市川左団次や市川猿之助らの共演で好評を博した。①

帝劇初舞台まで（山本安英『新版 歩いてきた道』）

とりとめのない思い出は、もう私が小学校に通い始める頃、例の祖父はすでにいず、母と三人の弟と、やはり横浜の一隅に貧しい暮しの日々を送っている頃からはっきりとして来ます。共に寝起きする父というものが私にはありませんでした。父は時々気弱そうな美しい面だちに眼鏡をかけ、長髪に琴の糸で織った被布で私の家へ現れ、おみやげの牛肉を自分で料理して私たちに食べさせては、すぐまたどこかへ行ってしまうだけの人でした。谷文晁の流れを汲む絵師で、それから茶の湯や生花を教えていたというこの父が、母に對して使う「あなた」とか「そうです」とか、時には軽い調子ながら「ございます」というような言葉ばかりを、子供心にも言葉がきれいというよりも何か遠慮勝ちなものに私が感じるのでした。

① 大山功著『近代日本戯曲史』近代戯曲史刊行会、一九六九年。第二卷（大正編）五五二―五五五頁。

どうして別居しなければならなかったか、その複雑な入りわけを、いまだ私は母に聞くこともできずにいるのですが、父の方には私たちの生活を助けるだけのゆとりが全く無かったらしく、私の覚えている限り、母はいつも朝から晩まで四人の幼い子供のために、心臓の悪いからだを働きづめに働いていました。・・・ただ一つにすがりついていた「職業」というのは、父の紹介だったのでしよう、「はま」のえはがき屋で売っている外人向けの写真やガラス絵に彩色をする下請けの仕事でした。・・・それを私が幼いなりになんとか手伝いをしようと思つて手を出すと、母はいつも厳しく私を叱りました。貧しくとも子供だけは卑屈にさせたくないというその母の気もちを察することができたのは、もちろんずっと後のことでしたが、その頃は叱られるのがわけもなく淋しくて、やっと願つて私と一番上の弟とに許されたただ一つの仕事は、えのぐを洗つて色のついたどんぶりの水を、日に何度か取りかえる仕事でした。・・・

小学校もだんだん上級になって来ると、母も少しずつ私に仕事をさせてくれるようになっていました。引っこみ思案のくせに負けん気だった私は、出来上った品ものをお店に届ける役を引きうけて、ふろしきを抱えては油の音のじゅうじゅうしている南京街を抜けてお店へ通いました。夕方などお腹をすかして、せまい南京街の裏通りのあちこちから流れて来る油の匂い、肉の匂いの中を、子供ながらもわびしい気持で歩いたものでした。・・・

芝居も幼い頃祖父や「ばあ」につれて行つてもらつた以外は殆んど記憶がなく、ただうちの患者待合室におくため毎月とつていた『演芸画報』は、私の待ちきれない楽しみで、ずいぶんくりかえしよみふけたものでした。新しい劇というものは、まだ社会的にははっきりした地歩を持っていなかった時代ですし、思想的にも社会的にもものを見る見方が多くの人々の口の上になつたのはそのしばらく後のことで、です

からこの頃私があこがれていた芝居の世界というものは、ただ漠然と「芝居の世界」として私の頭の中に画かれていたものにすぎませんでした。それとも一つは、前に書いたようにやはり私も何か職業をもって働きたいという気もちを持っていました。そのときの私自身の境遇は、そういうことを必ずしも必要としていなかったわけですが、横浜でいまでも二人の小さい弟を抱えて細々暮らしている実母の事を考えると、たまらない気もちだったのです。私は毎朝あけ方にそと家を抜け出して、赤坂の円通寺までお百度をふみに通いました。今考えると少々恥かしい気もちもありますが、ただただ何とかして自分の念願を通したいという一途なもので、別に何かを信仰するという気持ではむしろなかったのですが、それは自分でもかわいらしいと思う程ひた向きな気もちで、その折円通寺の尼さんから頂いたガラスの数珠を今でも大切に持っています。

何かの話にあるように、二一日目の満願の日、玄関を出ようとするとたん、投げ込まれた新聞に私は、市川左団次さんが松竹をバックにして、現代劇女優養成所の生徒を募集する、という記事を発見しました。私は養母に無理をたのんで、父に内密でこの試験を受けたのです。

新富座の芝居茶屋（猿屋）の二階は、応募者で一ぱいになっていました。母親について行ってもらったのは私だけだったので、少々気まりの悪い思いもしましたが、この時の試験場で初めて小山内薫先生にお会いしたのです。そしていまだによく理由の判らないのですが、その中から選ばれた五名の一人に私は入る事ができました。・・・当時二四歳だった土方与志先生も、この養成所に関係されていて、実技を教えて下さいました。

初舞台は一九二一年十二月、帝劇で小山内先生作の『第一の世界』で、演出は―その頃は演出とよばずに舞台監督と言っていました―小山内、土方与志の共同になるものでした。当時まだ猿之助、長十郎さん方

も一所だった左団次一座に、師走興行なので中車、小団次、松助、宗之助、寿三郎さん達も加わった大一座で、出しものは『増補信長記』『第一の世界』『奥州安達原』『鳥辺山心中』『拾遺太閤記』の順で五本立てでした。私は左団次さんの娘役で台詞も沢山あり、先生方の御苦労は大へんだったろうと、今になってよく判る気がします。下廻りの役者さんから「あたしなど永年芝居をやっているけど、まだろくに舞台上で旦那（左団次さんのこと）と口をきいた事がない、そんな役をふられたら、あしたしんでもいい」などどうらやましがられたものですが、左団次、松薦さんを始め松助さんなど一座の方々は、本当によく面倒をみて下さいました。階級制度のきびしい歌舞伎の世界には珍しいことで、ここにもやはり一座の方々が、新しい芝居を開拓してゆこうとされた熱意がうかがわれる気がします。

この養成所はこの公演をやっただけで、どういう事情からか翌年の春までで終わってしまいました。それで私はまた家庭へかえることになり、稽古ごとをつづけながら、時々小山内先生のお宅などにもうかがいつつ、またその間にはライオン児童齒科医院に勤めたりしましたが、そこに起ったのがあの関東大震災だったのです。

①

関東大震災を契機に人生の劇的転換に向うのは、のちの国民的女優東山千栄子（渡辺せん）である。彼女の祖先は下総佐倉藩の家老であって、父渡辺暢は高等法院院長を務め、貴族院議員に勅選された。兄弟姉妹の多い東

山は、小学三年のとき後継ぎのない叔父寺尾亨のもとへ養女として引き取られる。ここでは社交界に出るべく早くから育てられ、華族女学校に入学するとともに、雙葉学園でフランス語をも学んだ。法学博士の養父寺尾は謹厳であって、花嫁となるべき娘に小説を読むことも、芝居を観ることも禁じたとされる。男女交際についても厳しく、花婿の候補者を養父母が選び、彼女は十八歳のとき、原合名会社モスクワ支店長の河野通久郎と結婚した。一時帰国した通久郎と京都での新婚旅行を済ませた後、明治四二年ウラジオストックを経て、シベリア鉄道で着任地へ到着する。折しもモスクワは帝政ロシアの末期、ロシア革命の前夜にあった。彼女の自伝には夫河野の演劇に対する深い理解やロシア革命による日本への退去も述べられる。①

モスクワでの生活と観劇（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

モスクワには主人がアパートを用意してくれました。五部屋ぐらいあり、六十歳になるフランスとポーランドの混血の家政婦のおばあさんと、若いロシア人の女中がおりました。おばあさんは主人から私を紹介されると、両手で私を抱き、両ほおとくちびると、三つキスしました。はじめての経験なので、私はビックリしてしまいました。

こうしてモスクワでの私の生活ははじまり、八年間をここで暮らすことになったのでございます。そのころのモスクワはやつと数ヵ月まえに日本総領事館が設けられたばかりで、日本人はその方たちを含めても。

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』産業能率短期大学出版部、一九七七年。四一五、九一〇、一七一二〇頁。

八人ぐらいしかおりませんでした。女性はそれから三年あとまで私ひとりでした・・・

主人は文学や音楽を愛好しておりましたので、私に小説を読んで人生を知ること教え、またバレエやオペラやオペレッタに私を連れて行ってくれました。そのころにロシアは、帝政時代の爛熟期で、ましてモスクワは芸術の中心地でしたから、私は芸術に対する目をしだいに開かれて行きました。ポリショイ劇場ではじめて『白鳥の湖』を見たときの驚きと喜びは、いまでもわすれることができません。舞台の広さ、百人以上の踊り子たち、舞台装置のすばらしさ、音楽のうつくしき――明治の末期のころ、しかもお芝居やバレエなどをまったく知らない私だったのですから、私の驚きを想像していただけるでしょう・・・

モスクワではじめて見たお芝居は『桜の園』でした。その夜は主人が旅行者のご婦人をご案内し、私もはじめて芸術座にまいりました。私はこの高名なお芝居に対して何の予備知識も持っておりませんでしたし、同行の方からそのころ日本で出版されていた瀬沼夏葉女史の翻訳本をみせられたのも、劇場へ行ってからのことで、それも幕間にただチラチラとページをめくったくらいだったのです。

しかしそういう私が、その『桜の園』にすっかり魅了されてしまったのです。脚本が傑出しているうえに、モスクワ芸術座の創立者のひとりであるコンスタンチン・スタニスラフスキーの演出でありますし、その演出者自身が兄ガーエフの役で出演、作者チェーホフの未亡人オリガ・クニツペルが女主人公のラネーフスカヤ夫人に扮していたのですから、私ならずともそのすばらしい舞台から深い感銘を受けずにいられなかったことでしょう。

このとき私は、将来自分が俳優になるだろうとか、『桜の園』をやるだろうとかは夢想さえしていなかったのですが、それがこんなにひきつけられたというのは、あとになって考えてみると、後年私が俳優になる

動機がこのときあったような気がしますし、しかもその私が、やがてラネーフスカヤ夫人の役を三百回前後も演ずるようになったことの、いわば因縁のようにさえ思われます。・・・

のちの築地小劇場の創立者のお一人、小山内薫先生にはじめてお目にかかったのは大正元年でした。先生はモスクワ芸術座見学のためにおいでになり、それからドイツ、イギリス、フランスとお回りになって、シリーズン・オフに再びモスクワに戻られ、しばらく滞在なさいましたが、このときは私の家でお宿をいたしました。先生と私の主人とは、以前に日本でお知り合いになっていたのです。

モスクワ芸術座では先生はちょうど画家が名画を模写するような敬虔な態度で、スタニスラフスキーの演出を克明にノートなさいました。先生はモスクワ芸術座で、まえにご自身が先代市川左団次さんたちと自由劇場で上演なさったことのあるブーリキの『夜の宿』をはじめとして、チェーホフの『桜の園』『三人姉妹』『伯父ワニーヤ』などをごらんになりましたが、それらについてのノートが、のちに築地小劇場で生かされたのです。

しかし、ここに書いたすべての演目に、やがて私が出演することになるなどとは、よもや先生はお考えにならなかったでしょう。当時の私はまったく支店長夫人であり、人妻以外のなものでもなかったのですから。また小山内先生はスタニスラフスキーの家庭に招かれ、一座に俳優さんたちと親しく遊んだりなさったことを、楽しそうに話していらっしゃいました。

①

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二二―二三、二六―二八頁。

ロシア革命とモスクワからの退去（東山千栄子著『新劇女優』）

ひとつ主人に最も感謝しなければならぬことがあります。それは窮屈な生立ちをしたために全く閉じられてしまっていた私の眼を、文学、音楽、演劇など、あらゆる芸術の世界へ開けてくれたことで、私の退屈であった人生は、どうやらそこから息づきはじめました。・・・河野はその文学好きのまま法科を卒業して海外貿易に入りましたが、これは当時の世界の経済事情に感ずると共に、困難であった生立ちの経験からも、経済力の確立が第一、何ごともその上で考えたものでございましょう。原輸出商会に入って直きにリヨン支店詰めとなり、ずっと日本を離れて暮しました。それで日本の文学の動きが次第にわかりにくくなったのでしょうか、その代り小説類の原書の入手は思うままでしたし、音楽にしても演劇にしても、日本では思いも及ばぬ本舞台のものに接し、初めは手探りから次第に自分一個の鑑賞力を得て、殊にモスコーにいったからは、丁度爛熟期の露西亜芸術に心ゆくまで親しみました。・・・

やがてこの重苦しいまでの芸術的雰囲気にあったモスコーが、あの歴史上永遠に記録すべき革命の一撃によって破壊される時が来ました。私共はその革命前に何も知らず、暫くの休暇をいただいて日本へ旅立ちました。そうして東京に帰っていて現場に居合わせなかったのは幸か不幸かわかりませんが、私共の住居は丁度クレムリン宮殿と士官学校の間の処にございました。東京において号外で革命を知り、次の報道を待っても、今のようにならじなど迅速にわかる時代ではありません。重大な時に店を留守にしていたことですから、主人の心痛も一通りでなかった次第です。幸いに店の人達も無事に脱出して帰り、その話で、瞬間に打込ま

れた銃火に焼けた店や住居の様子もわかりましたが、その人達は言いました。「支店長夫妻がいなかったのは、幸いだった。もしあの場所にいたならば生命の危険はもとより、何かを取出そうとして火の中に飛込んだかも知れない。」そういわれて私共も黙する外ありませんでした。

勿論家庭のことで見ても、主人が独身の時代の七年に、私が行ってからの八年を加えて、十五年の間に自然と出来ていた物一切、モスコーにあるのが私共の全部でしたから、故国の空に旅着の着のみのまま、これで振出しの無一物に戻ったという有様でした。間もなく領事館の引き上げとなり、主人が十五年苦心のあとも全く水泡に帰しました。主人の落胆するのも道理、実に主人のモスコーにおける信用は、もう充分にその後の仕事の堅実な成功を保証してあまりあるものであったのです。そして主人の文学的氣質が何処よりもよく合う露西亜であったのです。①

十五歳で築地小劇場の舞台、『青い鳥』の主役に起用される及川道子は、敬虔で清貧な両親に育てられた。勝気で幼時から歌や芝居を好んだが、病弱な体質で小学校への入学も一年遅れる。青山でささやかな喫茶店、パーラー・オアシスを営む一家は、大地震の一カ月前道子の療養を兼ねて、避暑地への出店を引き受け、館山湾沿岸へしばらく移転していた。後年映画女優としても注目されつつ、二七歳で夭折した彼女の自叙伝を繙いてみる。

① 東山千栄子著『新劇女優』学風書院、一九五八年。四七―四八、五〇―五一頁。

房総海岸 大正十二年夏（及川道子著『いばらの道』）

楽しい時、苦しい時、また喜びの時、悲しみの時、先ず父の口をついて出るものは讚美歌の一節でした。思えば父のこの讚美歌によって、励まされ、慰められたことの何と多かったことか！過去二十幾年の私のいばらの道で、唯一つの光明はこの父の讚美歌の他ありませんでした。・・・

父が讚美歌を連想させるように、母と云えば、私は童謡を思い出します。その最初の記憶は何でも私の四つか五つの頃だったと思います。その頃はリンパ腺を腫らして、病院へレントゲンをかけに通っていました。それも遠い冬の寒い道を、弟をおんぶした母に手をひかれて、電車にも乗らず、とぼとぼ歩いたものでした。・・・そんなとき母いつも寝台の側で『ハトボツボ』や『トンボトンボシヲカラトンボ』等の童謡をうたって聞かせて、私の機嫌をとってくれました。それから学校に上りようになっても、学校で教わるどの唱歌も、母はよく知っていて、家でいろいろ教えられました。・・・

十二、三になってから、お友達と遊ぶにも―その頃は唱歌会やお芝居ごっこが好きで、よく遊んだものですが―いつも自分が先生（所謂舞台監督）になって、自分よりも大きなお友達を犬にしたり、猿にしたり、お百姓さんにしたりして、自分の思う通りになって遊びました。・・・

体の弱い私は普通の人と同じに入学が出来ずに、九歳の時に始めて学校へ行きましたが、学校へ通うようになってからも、始終病氣勝ちで、五年生になった頃には、肋膜炎が悪いと医師から注意を受けました。

医師から肋膜炎の注意を受けたその年の夏に、私たち一家は房州の北條へ行くことになったのです。それは避暑などという贅沢なものではありません。ちょうどオアシス・パーラーと取引関係のあるカルピス会社で、

北條の海岸へテント張りの売店を出すことになったので、それを引き受けて、言わば出稼ぎに行ったようなわけです。けれども私の両親が、進んでこの売店を引き受けたのは、たとえ暫くの間でも海岸で暮したならば、私の病氣のためにどれだけの効果があるかもしれないーという尊い親心からであったでしょう。

オアシス・パラを休業にして、北條へ行った私たちは、諏訪森の下にある新築したばかりの家を借りて、そこを住居にいたしました。諏訪森の下から海岸までは、いくらか道程がありません。私たちは毎日海岸にあるテント張りの売店に出向いて働きました。私を真実の妹のように可愛がっていつも励まし導いてくださった佐々木さんが、一緒に北條へ来ておられたので、その佐々木さんと父が支配人兼コックさん、母が後見人で、私と強子とがお給仕さんです。

高等師範や早稲田大学の水泳部の方や、避暑に来ておられる人々などで、海岸はいつもお祭のようになりやかでした。私たちの店も大繁昌の日が続きました。殊に夕方になると、きまったように高等師範の方々が大勢集まって来られて、丁度天幕の中は何かの倶楽部のような感じでした。私と強子とはよく『坊やの裏の柿の木に』や『踊れ踊れ、風吹くままに』等、その頃流行った童謡をうたいながら踊って見せたものでした。するとこんどは、学生さん達が私達の知らない歌をうたって、教えて下さったり、面白い話を聞かせて下さったりしました。そして、お店をしまった後は、帰途によく海岸を散歩しました。空には星が降るようにキラキラと美しく輝き、海ではそれと美を競うかのように夜光虫が綺麗に光っていました・・・

こうした楽しい日々を送っているうちに、私もいくらか健康を回復して、顔色なども目立って丈夫そうになってまいりました。けれども、楽しい時が経っていくのはとりわけ早いもので、まもなく八月も終わろうとする頃には、水泳部の方や避暑客などもだんだん引き上げていく方が多くなって、一組減り二組経るという

ようにして、今まで賑かであっただけに、急に寂しさが海岸を襲って参りました。

夜中にふと目をさまして、静かな波の音に混って聞えて来る、近くの畑のトウキビの葉擦れを耳にした時など、もう秋が身近に迫っているのが、しみじみ感じられ、そして間もなく東京へ戻らねばならないことを、今更のように考えさせられるのでした。①

自立と自由をめざして俳優への道へ進む女性が続出するとともに、新劇の振興を支援するパトロンも現れる。明治女学校で星野天知や島崎藤村の教えを受けた相馬黒光（星良）は、夫愛蔵とともに本郷の東大正門前でささやかなパン屋を開業し、やがて顧客の漸増で新宿に支店を設けた。新宿では隣家をアトリエに改造して、同郷の荻原碌山など画家の便宜に供し、インド独立の志士チャンドラ・ボースや盲目のロシア詩人ヴァスィリ・エロシエンコを庇護する。こうして相馬夫人黒光の主宰による〈中村屋サロン〉が形成され、新劇脚本に依拠する朗読会から〈土壌劇場〉での公演へと進展した。

相馬黒光「土蔵劇場」『黙移』（『相馬愛蔵・黒光著作集』）

エロシエンコが私の家におります頃、私は盲目の彼のためによくいろいろの文学的作品を読んできかせました。エロシエンコはそれによろこびましたが、私はかねて脚本朗読に興味をもち、脚本は黙読す

るものではなく、朗読すべきもの、各登場人物の台詞をそれぞれ読みわけてこそ面白くもあり意味もあると考えておりました。そしてエロシエンコに読んできかせ、彼がそれをよるこんだのが動機となりまして、秋田雨雀氏を中心として、神近市子さん、上村露子さん、佐藤誠也、佐々木孝丸、早稲田出身の能島、法政の佐賀その他の諸氏が集まり、中村屋の表二階（いま喫茶部になっているところ）を開放して脚本朗読会をはじめました。花柳はるみのようなこの道の本職も、ときどきは交って指導してくれるというふうで、脚本は中村吉蔵氏、仲本貞一氏、川村花菱氏、秋田雨雀氏の作品がおもなもので、翻訳劇ではストリンダベルグの『ペリカン』、ダヌンチオの『ジヨコンダ』、ユーゴーの『鐘楼守』、ギリシャ悲劇のアンチゴーネ、ロシアのものでチエホフの作などが、今でもはっきり記憶に残っております・・・

そのうちに一同もはや朗読では満足できなくなり、ぜひ試演をしてみたいと熱心な要求が出て、とうとう私共の新築したばかりの大広間を提供し、めいめいが俳優となって秋田さんの脚本をやってみました。何という題であったか忘れましたが、何でも薄暗い獄舎の中に囚人が幾人も座っているとありました。衣装や小道具はみな有り合わせのもので、巡査の制服制帽だけは本物をこっそり借りてきました。サーベルのカチャカチャするのにも実感があらわれ、初演にしては成功でした・・・

この試演で会員はいやが上にも自信を高め、とうとう主人を説き落して、私どもが当時手に入れたばかりの麴町平河町の住居、といってもまだ移転していませんでしたので、それを利用し、三間に五間の二階建ての純日本風式の土蔵を舞台に改造してもらいました。同時にこれまでの朗読会をあらため、先駆座の名乗りをあげ、さらに川添利基氏や玄人の河原侃二氏などが加入して指導に当り、また上演することになりました。

その最初に上演されたのは秋田氏作『手投弾』と、ストリンダベルグ作の『火あそび』。ここで困りまし

たのは、男子の方々の意気盛んなのに反し、女子の方はほとんど影を没してしまって、女優になり手がないことでした。そこで私は千香子を説得して出場させ、なお千香子の級友のうちでまだ家庭に残っていたお嬢さん二人を勧誘し、そのお母様方の諒解を願って拝借することにいたしました。それに誰かの紹介で義太夫語りとして高座にも出た経験のある婦人の加わり、辛うじて入用だけの女優が揃いました。そして出て頂いたお嬢さん方は、当時早稲田大学生であった長男安雄がお家まで送りとどけ、あるいは予めおことわるしておいて宅にお泊めしたり、とにかく私が心を配りまして、二ヶ月くらいも稽古をいたしました。いよいよ四月二一、二二日に二日間開演することを発表し、会員のはげしい稽古は涙ぐましいばかりでした。

こういうふうには土蔵を改造した舞台であるとともに、また土蔵に立て籠っての研究で、誰いうともなく土蔵劇場の名が生まれたのでございます。土蔵の二階を舞台に改造するには、私どもの経済としてかなりの犠牲を払いました。芝居が終われば舞台は取りはずして押入にし、照明に用いた幾十の電球とスイッチは常にこの押入の中に入っていました。階段ふたつ、カーテンの仕掛け、見物席の設け、また母屋の各室は臨時女優の楽屋に、あるいは見物人の休憩所にあてるといふ次第でずいぶん熱中してやったものでございます。芝居が済み、掃除をして四月末日に私ども家族ははじめてここに住居を移し、新宿の家はその家全体を店として使用することになったのでございます。

多くの思い出を籠めたこの土蔵劇場も、あの大正十二年九月一日の大震災で、使用に堪えないほど破壊されてしまいました。そればかりか一時は座員も互いに安否を知る由なく、十二年も過ぎて翌年の春ようやくそちこちから出て来て顔が合い、玄閑脇の狭い応接室で再び朗読会をはじめました。けれども土蔵は容易に

修繕が出来ず、芝居はやりなくなりました。①

土蔵劇場における先駆座の公演は大正十二年四月二日および二二日に催され、それに先立って二十日には試演が行われた。客席がわずか五十であるため、観客は会員制と限定されるが、優先順十名の錚々たる名簿が次のように記録される。一番島崎藤村、二番有島武郎、三番長谷川如是閑、四番水谷竹紫、五番水谷八重子、六番藤森成吉、七番吉江喬松、八番大山郁夫、九番馬場孤蝶、十番石川三四郎。演出は川添利基、装置は柳瀬正夢が担当し、秋田雨雀の求めに応じて、島崎藤村と有島武郎が感想を述べたとされる。②

幸徳秋水ら社会主義者の演説に感銘をうけ、島村抱月からは創作の才能を認められた秋田雨雀は、吉井勇や谷崎潤一郎とともに新劇勃興を支援する作家群に加わった。封建主義を批判した彼の戯曲『第一の暁』は、明治四四年六月自由劇場の一環として有楽座にて上演される。雨雀が代表作『国境の夜』を発表したのは、わが国最初のメーデーが挙行され、神戸の川崎造船所で初めて労働者劇団が結成された大正九年である。やがて彼は〈中村屋サロン〉における朗読会に参与し、劇団先駆座を組織して土蔵劇場での上演を指導した。震災直前における彼の日記には土蔵劇場の模様とともに、有島武郎の情死や大杉栄との会合も記述される。

① 相馬黒光『黙移』（『相馬愛蔵・黒光著作集』郷土出版、一九八一年。第三巻、二五一―二五五頁。

② 曾田秀彦著『民衆劇場―もう一つの大正デモクラシー』象山社、一九九五年。二七六―二八五頁。

白井吉見『安曇野』筑摩書房、一九七二年。第三部、四二二―四二三、四二九―四三三頁。

秋田雨雀「土蔵劇場での公演と有島武郎の死」（『秋田雨雀日記』第一巻）

（大正十二年）四月二十日 土曜劇場のことで警視庁と麹町警察へ行く。麹町警察のわからないのには弱った。・・・招待日は三十名ほど来客があった。『手投弾』は三場ともよくいった。娘になる瀬尾君がよかった。佐藤君は一箇所とちった。二場の舞台照明もよかった。有島武郎君がきてくれた。中村屋の娘さんのわがままには弱る。いつかわかるだろう。（招待日は成功した）

四月二一日 麹町署で試演の許可をえた。先駆座という灯明台をつけたらいけないといった。役人の頭といるものは妙に働くものだ。臨検にゆくと云っていた。・・・七時過ぎに開幕。きょう『手投弾』はすてきによくいった。いままでのうちで一番いい。『火あそび』も悪くない。ひげが落ちたので心配した。全体としてきょう一番よかった。黒光女史に手紙を出した。中村吉蔵君がきてくれた。夜柴原君と会食。（先駆座第一日）

四月二二日 七時半開演。『手投弾』の第二場じゃたいへんよくできた。金子君が喜んでくれた。三場の光線もよかった。梅田親子、中市君。矢部、青山、水谷八重ちゃん、運天、山田たづ子の諸君がきた。紅蓮さん、中市君と三人でおでんやで会食。（先駆座第二日。愉快な日）

五月二六日 身体がいくらか元気づいてきた。夜中村屋で先駆座の朗読があった。イブセンの『海の夫人』をやった。中村屋の娘はいくらか折れてきていた。・・・

五月二七日 蓼参。鳴海、仁尾、中市の三君とすずらんにより、森飛雪君を訪い、名物屋で有島、前田河、

佐藤、橋浦の諸君と会合。あとで有島武郎君を送っていった。一時間ばかりいた。蓄音機をかけてくれた。フロンズの手。帰路おでんやによった。(有島武郎君との最後の会見)

七月七日 身体はまったくいいようだ。午後七時から中村屋の朗読会へゆく。運天姉妹もきた。『アスパラガス』っと『犬』に決定した。夜二時『日々新聞』記者の自動車がぼくの家から帰るのといっしょになった。その記者の言葉によつて、有島武郎君が信州で、ある女性と情死を遂げたということを知った。女は誰だろう？佐藤、佐々木二君と女のことを想像しあった。桜井夫人ではないか？(有島武郎君死す。)

七月八日 昨夜眠れなかった。朝『読売』の清水君がきた。明日の文芸欄に感想を話した。氏の潔癖性とニヒリステックな傾向について。有島家を訪い、名刺をさしだした。弔問客が多い。女の名と素性について。遺書公開。・・・有島君の対称は例の美人記者波多野あき子だ。

七月九日 有島武郎君告別式。雨のなかを新島英治がきよう葬式があるから、といって迎えにきたので、二人で有島家へゆく。玄関から布がひきつめて、祭壇のところまでいけるようにして、祭壇には故人の写真が飾ってあった。喪服をきた老母と三人の子供が眼についた。守田勘弥といっしょに焼香した。生馬君がぼくの手を握って、悲痛な顔をしていた。二階で足助君に遺書をみせてもらった。鉛筆で、こころもち乱れた書きかたをしている。涙がでる。午後二時自動車で青山へゆき、埋葬した。

七月二八日 暑い。散歩。墓地で日光浴をやった。夜パウリスタで大杉栄君の歓迎会があった。大杉君は若くなったような気がする。野枝君は洋装していたが、お腹が大きいのだそうだ。利部をスパイだといって、

ある男がなぐりかかったので、みんなで止めた。カフェ新橋とロシアによった。①